

連載 “Well-being”ことはじめ

第 86 回 崇高さを味わう

臨床心理士・公認心理師・カウンセラ

三村 和子

先月号のメルマガでヨハン・セバスティアン・バッハの生涯、そして代表曲「マタイ受難曲」について検討しました。バッハの音楽への情熱と創造性、そして困難に立ち向かう姿勢から、現代の働く人が前向きに生きるヒントが得られるのではないかと考えたからです。バッハが生涯をかけて表現しようとした最も重要なことは神への信仰心です。キリスト教徒でない私にとってそれは「崇高さ」として感じられます。「崇高さ」は現代の心理学ではポジティブな感情体験として認識され、崇高さを感じることで思考の幅が広がるなどウェルビーイングに寄与すると考えられています。今月もバッハの「マタイ受難曲」について検討し、崇高さを深く理解することを目指します。

マタイ受難曲は聖書「マタイによる福音書」26 章、27 章に基づくイエス・キリストの受難を描いたオラトリオ（教会で演奏される宗教的な題材を元にした楽曲）です。マタイ受難曲のストーリーの概略を以下に記します。

- 1) 最後の晩餐: イエスと弟子たちが過ごす最後の食事が描かれる。
- 2) ゲッセマネの園: イエスがゲッセマネの園で神に祈りをささげる。ユダに裏切られ、捕えられる。
- 3) 裁判: イエスはローマの総督ピラトの前で裁かれる。
- 4) 十字架への道: イエスが鞭打たれ、十字架を背負ってゴルゴタの丘へと向かう。
- 5) 十字架上の死: イエスが十字架上で処刑され、死を迎える。
- 6) 埋葬: イエスの遺体がヨセフによって墓に葬られる。

2) ゲッセマネの園の場面でイエスを裏切るユダは、イエスの信頼が最も高い弟子であったにも拘わらず、銀貨三十枚と引き換えにイエスを引き渡してしまいます。結果イエスは逮捕されて十字架にかけられます。そしてユダは良心の呵責により自ら命を絶ちます。3) 裁判の場面では、ピラトはイエスを赦そうとしますが、ピラトの意志に反して群衆が強く反抗し十字架の刑に処することになります。5) 十字架上の死は、イエスが人類の罪を贖うために究極の犠牲となるというとても痛ましい場面であると共に、キリスト教徒にとっては信仰の源となっています。

ドイツ文学者でありキリスト教学者である杉山好氏はバッハの「マタイ受難曲」における象徴表現とその現代的な意義について詳しく論じています。杉山氏は6)の埋葬の場面の合唱（第 68 曲）について、ドレスデンのクロイツ・カントル（教会音楽師）であるフレーミ

ヒ教授による指揮、クロイツ・コーア（十字架合唱団）という少年合唱団による演奏を聴いてとても感動したエピソードを記しています。該当箇所の歌詞は以下です。

「われら涙流しつつひざまづき、御墓なる汝の上に願いまつる——憩いたまえ安らかに、安らかに憩いたまえ！」

これはイエスが墓に納められ、その亡骸に向かって皆が跪いて呼びかける場面で、「主の眠りの平安」の表現と受け止めることができます。実際に、他の指揮者・演奏者はそのように表現するそうです。しかし、フレーミヒ氏による指揮では「驚くほど澁刺としたテンポとものすごい気迫とエネルギーをこめて演奏」だったそうです。杉山氏はこの演奏について「ここからが新しい出発なんだ」と感じ入ったといいます。そしてこの表現は「(当時の統一前の) 東ドイツの人たちの心と生活の支えである」と思い知らされたそうです。今を生きる私達は戦争やテロへの恐れ、環境問題、SNS やフェイクニュースなどの情報環境、食糧問題、物価高騰など、様々な困難に見舞われています。こうした困難の中でも、受けとめ方や自らの行動により、ポジティブに生きる道が開けると考えられるのではないのでしょうか。

ここまでは「マタイ受難曲」の解釈について検討しました。次に杉山氏が述べる音楽的な象徴、つまり隠された意味について検討します。まず、「マタイ受難曲」の構造は、第 1 合唱隊と第 2 合唱隊という 2 群に分かれています。これはバッハの職場であったトマス教会の建物の構造に合わせたということです。「オルガンを中心にして、左右対称的に二群の合唱と、同じく二群の合奏隊ができる楕円形の湾曲を形作っていた。それを活用したこの二重合唱の楽曲構成は対話的掛け合いを基本とした作品」であるとのこと。一般的に演奏を聴く場合、舞台から一方方向に流れる音楽を聴衆が受け取るという形式ですが、バッハがとった構造では、聴衆は第 1 合唱隊と第 2 合唱隊の対話に引き込まれ、まさに自分が受難の真ただ中にいるように感じる世界が描かれたのでしょう。

また、この対話は e-moll（ホ短調）で始まり、地上の世界でイエスが十字架を背負わされる場面が描かれます。厳しく虚しい状況が描かれた後の 30 小節目に入ったとき、ボーイソプラノの斉唱が入ります。この 30 という数字にバッハは、 $30=3\times 10$ 。3 は三位一体の 3 を示し、3 は神の世界「神、子、精霊」を象徴する数です。そして 10 はモーセの 10 戒の 10 です。

また、このボーイソプラノの斉唱は、G-dur（ト長調）であり、この前の e から 3 度上の音階です。G とはドイツ語では Gott（神）、あるいは Geist（御霊）の頭文字です。また、杉山氏の研究によれば、冒頭合唱の通奏低音（音楽用語で、楽曲を支える基盤を担う部分）では「神秘的な動き」が見られるといいます。それは、主音であるいちばん底の E（ホ）の音から始まって音階を 1 つずつ上昇していき、13 段上がると C1（1 点ハ）の音になる。そして、今度はオクターブ 1 つ下がる。つまり、1 から 13 まであがって、14 段目で突然 C に下がるという動きであるそうです。

杉山氏はここに「バッハは自分自身を読み込んでいる」といいます。イエスがピラトの宮廷を出てから、処刑場であるゴルゴダの丘まで連れていかれる、13 番目が十字架、14 番目の C は、Christus（ドイツ語のキリスト）と十字架の頭文字です。13 から 14 で突然 1 オクターブ下がるところが、「落ちる」＝墓を意味するということです。また、14 という数字はバッハのサインであるといえます。ラテン語のアルファベットで A が 1、B が 2 という風に当てはめると、BACH の綴りは、B (2)、A (1)、C (3)、H (8) となり、合計で 14 となります。十字架にかけられ無残な死に方をしたイエスを、バッハは自分のことのように考えたというのが杉山氏の解釈です。マタイ受難曲ではこの通奏低音の伏線が全曲の最後の方にもわたって首尾一貫して出てくるといいます。

杉山氏によると、このように数字を象徴的に用いることは他にもたくさん見られるということです。こうしたバッハの作曲技法の一貫性と象徴表現の巧妙さは強い宗教的信念と自己認識の反映と杉山氏は指摘します。また杉山氏が強調するのは、バッハは天才ではなく、地道な努力家だったのではないかということです。先月号に記した通り、バッハは様々な役割をこなしながら、神の加護を頼りとして教会音楽を未来に遺そうと天職を全うしました。時を超えて今なお壮大な音楽の世界が実現されることに尊敬の念を持ちます。

バッハは 1000 を超えるという楽曲を遺しましたが、自らの人生や信仰心、音楽への思いについては書き残さなかったといえます。そのため、現代を生きる私達は杉山氏のような研究者の著作から学び、楽曲を鑑賞して想像することしかできません。しかし、「マタイ受難曲」を聴いて崇高さを味わいながら自らの受難に立ち向かう力を見出すことができます。

現代の働く管理職の中には、時には信頼を寄せていた人に裏切られたと感じたり、自分ではどうしようもないと感じることもあるでしょう。そんな時、音楽や美術、壮大な自然に触れるなど崇高さを味わう経験により、イキイキしたエネルギーを取り戻して再び前向きに仕事に取り組むことができるかもしれません。崇高な経験は、心を落ち着かせ、ストレスを軽減し、問題に対処する新しい視点をもたらします。また、崇高さを味わう行動を通じて得られる満足感や精神的な充実感、困難な状況に立ち向かうための支えとなります。さらに、長期的な自己成長やレジリエンスを育むきっかけにもなります。管理職が受難を乗り越え、よりよいリーダーシップを発揮するための土台が整うと考えます。

IS 技術者の方々がやりがいを持って働くことができるよう、そして組織がよい方向に向かうために何がよいのかについて、本稿では今後も探って参ります。皆様からのご指摘やご意見をお待ちしています。

<参考・引用>

*1) 杉山好, 聖書の音楽家バッハ: マタイ受難曲に秘められた現代へのメッセージ 音楽之友社, 2000